

## アクションリサーチを用いた看護実践を語る会による 看護師の気づきと行動 東 めぐみ

### I. 序論

複雑化する医療現場は既存の知識が役に立ちにくく、問題の答えが分かりにくい状況であり、職場での学びを転換する必要がある。看護師自身が経験から学ぶ方法を学習し、専門的な知識やスキルを伸ばすことができる方法が必要である。その方法を対話とし、対話が生まれる場として、看護実践を語る会を開催したいと考えた。

### II. 研究目的

本研究の目的は急性期病院で働く看護師が看護実践を語る会に参加することで、看護師相互の実践の語りからどのような気づきを得て、それをどのように行動に移すのか、また、看護師間や周囲の看護師にどのような変化をもたらすのかを明らかにすることである。

### III. 研究方法

看護実践を語る会を用いたアクションリサーチである。A病院に依頼を行い、B病棟の語る会に参加する看護師5名およびインタビューのみに参加する看護管理者（以下、師長）を研究参加者とした。期間は2019年1月より2019年10月までであった。

アクション前に看護師5名と師長に半構成的面接を実施し、アクションの語る会を月に1回、計5回開催した。アクション終了後に半構成的面接を行い、師長にはアクション終了3ヶ月後にも実施した。語る会および半構成的面接は、許可を得て録音し逐語録とした。分析は「語りからどのような気づきを得て、実践にどのように活かしているか」等を問いに行った。

### IV. 結果

語る会は計5回行い、平均時間は92分であった。参加者は1回につき3~4名であった。事前面接では「経験の違う看護師とは語らない」などがあった。第1回語る会ではD看護師が「創洗淨がいやだという患者の思いをキャッチしその理由を聞き、思いに沿える洗淨方法を工夫した」と語った。F看護師は「患者のいやだという理由を考えたことがなかった」「ケアの方法を変える発想がなかった」ことに気がついた。第3回ではF看護師が「食事をとらないで低血糖を起す患者」に対し「語る会での患者の理由を聞いていないことを実践しながら思い起こし、食事をしない理由を聞いた」と患者の理由を知ろうと意図的に行動しケアの方法を変えた実践を語った。事後面接でF看護師は語る会により「話すことで先輩からいろいろなことを聴ける」ことに気がつき、師長は「病棟でFさんは語る会に参加していない看護師に声をかけてあちこちで語っている」と語った。

### V. 考察

看護師は他者の語りから気づきを得ていた。看護師相互の対話によって気づきが言語化されることで共有され、その気づきを実践しながら思い起こし、これまでと違う方法を選択し新たな行動が

生まれていた。また、次の語る会で方法を変えた実践を語ることによって、他者から肯定的なフィードバックが得られ、対話による微細運動（森岡，2005）が起き、さらに語りが進められ行動につながったと考える。

## **VI. 結論**

看護実践を語る会において看護師は、他者の看護実践の語りを聴くことで、自分にはない新たな視点や発想を得ていた。語る会による気づきは意識化され、次の実践において新たな行動となった。新たな行動は次の語る会で語られ、気づきの連鎖が起きていた。これらにより、これまで行われていた看護実践を意図的に改善することができ、より良質な看護実践につながることを示唆された。